横浜市立 阿久和小学校　　学校評価報告書　　（ 令和 元 ~ 3 年度 ）

重点取組分野	令和　元　年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
豊かな心	①特別の教科道徳の充実を図り、年1回以上保護者、地域の方に公開をする。また、道徳推進教諭が中心となって、研修を行う。②YPアセスメントを年2回以上実施し、児童の実態や変容を把握する。その結果をもとに授業を行う。たてわり活動の充実を図り、自己有用感を高めていく。	①道徳の授業は、年間の指導計画に従って計画的に進められている。授業参観で保護者にも公開を行った。②たてわり活動が年間を通して充実したことで優しい心が育まれるとともに、高学年の自己有用感の高まりにつながってきている。	B
生きてはたらく知	①「あくわスタンダード」の充実を図り、1年生から6年生まで一貫した指導ができるようにする。②4～6年生は、少人数算数を実施し、個に応じた指導を進める。また、本年度は、算数科を重点研究の教科として取り上げ、児童が主体的に学習にのぞむことができるような数学的活動を研究していく。	①あくわスタンダードに沿った一貫した指導が全職員の共通理解のもと行われ、児童指導につながっている。②支援の必要な児童の目線に立って、授業づくりや環境整備が整ってきている。少人数指導、TT指導、取り出し指導など、授業形態を変えながら取り組んできた。	B
特別支援教育	①配慮が必要な児童の支援について、全教職員で共通理解し、どの教職員も対応できるようにする。また、関係機関との連携を図り、支援の在り方等について理解を深めていく。②個別支援学級児童の実態に応じて、交流を進め、分け隔てのない関係を構築していく。	①配慮が必要な児童について共通理解を図り、チームとして対応を考えることができていた。特別支援教室の立ち上げも行い、学習支援の体制も整ってきた。②個別支援学級と一般級の担任同士で連絡を取り合い、交流内容を考慮した。	A
児童指導	①「あくわスタンダード」の見直しを行い、児童への定着を図っていく。また、保護者への理解を進めるため、学校説明会をはじめ、学校便り等で必要に応じて発信していく。②児童の状況に応じて、朝会や集会で、全体指導の場を設け、学校全体で指導にあたっていることを確認できるようにする。	①児童指導は担任ひとりで対応することなくチームで相談し、解決することができる体制がある。子どもの実態に合わせ、ルールブックの見直しを行いながら指導にあたれている。保護者への理解は今後も継続して取り組んでいく。②朝会での共通理解が有効であった。	A
健やかな体	①食育の授業を実践し、児童の関心を高める。また、健康や食育について、集会等で発信し、日頃の意識を高めていく。②学校保健委員会では、校医や薬剤師を招き、専門的な見地からお話を伺い、児童の保健への関心をもたせるようにする。	①健康や食育に関心をもてるように、集会や掲示等で発信してきた。委員会の活動を通して、楽しみながら学習を進めることができた。②学校保健委員会では睡眠について具体的な活動により、児童の意識が高まった。	A
地域連携	①保護者への学校への関心を高めるために、教育活動に参加できる機会をつくる。また、懇談会等への参加者を増やすための工夫をしていく。②新しい保護者の会と学校との関係を構築し、年間を通して、計画的に支援していただけるような形にする。	①学校・家庭・地域の連携については現状を維持している。学校説明会や懇談会のもち方を見直し、より多くの保護者に来校してもらうための計画を進めている。②本年度より発足した保護者と教職員の会とは、年間を通して互いに協力して活動する体制が整ってきた。	B
教育環境整備	①情報・視聴覚機器の充実をさらに図り、授業への効果的な活用について研修を行う。②校舎内外の環境整備に努め、児童が安全に学習活動が進められるようにする。また、掲示板を活用し、児童の学習の成果が見えるようにしていく。	①情報主任を中心にICT支援員との連携のもと環境が整った。研修によりスキルアップを行いながら、授業へのより効果的な活用に努めたい。②毎月の安全点検により、児童の安全な学習活動が進められている。掲示板の活用は今後も積極的に活用していく。	A
いじめへの対応	①月1回いじめ防止委員会を開催し、全教職員が共通理解し学校の現状を把握できるようにする。また、具体的にどのような対応してきたのか、今後どのように進めていくのかなど具体的に話しができるようにする。②定期的にいじめアンケートを実施して、児童の実態を把握する。	①いじめ防止委員会によって、ブロック間や全職員で共通理解を図れている。また、児童支援専任を中心に、未然防止、迅速な対応が行われている。②アンケートの実施により、児童とじっくり話をしたり、児童理解を注意深く行ったりすることで、実態把握につながっている。	A
人材育成・組織運営（働き方改革）	①低中高ブロックを組織し、必要に応じて連携が図れるようにする。級外教員もブロックに属し、そのブロックの運営に主体的にかかわる。②行事ごとに学校評価を行い、振り返りをする中で、行事の精選を図り、教職員の負担、児童の負担の軽減につながるようにしていく。	①ブロック間での連携が授業や行事等でも多くなり、協力体制のもとに活動を進められた。②これまでの学校評価をもとに、運動会やあくわ博など、見直しを進められた。行事の精選を行い、児童及び教職員の負担軽減が行われた。精選されたことで育てたい力の明確化とモチベーションの向上につながった。	A
ブロック内評価後の気付き	ブロックでの小小・小中での授業研究や職員間の交流を通して、基礎基本を確実に身に付けるための手立てやコミュニケーションを豊かにするための手立ての共通理解が図られてきている。また、授業を見合い、協議会での意見交換や情報交換によって、つながりを意識した教育活動の推進はある程度充実したものであった。今後も、ブロックが設定した9年間での育成を目指す資質能力を共通理解し、「夢の実現に向かって」が達成されるよう、繋がりのある小中一貫教育の推進を行いたい。		
学校関係者評価	子どもたちは、全体的に落ち着いて学習に取り組み、地域でも気持ちの良い挨拶ができている。学校全体で赤青鉛筆を活用して、めあてとまとめを分かりやすく書くことで、子どもたちは今何を学習しているのかが明確になっているので、今後の学力の向上も期待している。何よりも子どもたちが楽しそうに学校生活を送っている姿が見られ、とてもよいことだと感じる。たてわり活動で異学年の子ども同士がコミュニケーションをとり、互いに優しい心を育てている。不登校や特別支援など、社会的問題とも言える状況がある中,子どもたちにとって居場所があり、安心で安全な学校であってほしい。		
中期取組目標振り返り	「わくわくする学校」「チャレンジする学校」を創るために、「あくわスタンダード」を共通理解として、1年生から6年生まで一貫した指導を行うことができてきている。また学習面においては、算数科を重点研究として取り組み、児童が主体的に学習に取り組むことができるような数学的活動を研究することができた。少人数指導、取り出し指導など、個に応じた指導を行える体制が整ってきている。小規模校であることを生かして、たてわり活動を取り入れた行事を行うことができている。次年度に向けては、学校・家庭・地域の連携に向け、学校説明会のもち方を工夫していく。		

重点取組分野	令和　2　年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
豊かな心	①特別の教科道徳の充実を図り、年1回以上保護者、地域の方に公開をする。また、道徳推進教諭が中心となって、研修を行う。②YPアセスメントを年2回以上実施し、児童の実態や変容を把握する。その結果を授業に反映させていく。たてわり活動をより充実させ、自己有用感を高めていく。	①感染症対策のために、道徳科の授業公開が実施できなかったので、次年度以降の実施可能な方法を今後検討していく。②YPアセスメントは1度のみとなったが、児童理解や授業改善に生かせた。また、たてわり活動は、多くの制約の中ではあったが、児童の自己有用感を高められた。	B
生きてはたらく知	①「あくわスタンダード」の充実を図り、1～6年生まで一貫した指導ができるようにする。②低学年は取出指導、高学年は少人数算数を実施し、個に応じた指導を進める。算数科を重点研究の教科として取り上げ、児童が主体的に学習にのぞむことができるような数学的活動を研究していく。	①「あくわスタンダード」をもとに教職員間の共通理解がよく図られ、一貫した指導を行えた。また、スタンダードの見直しや改善をしつつ指導を進められた。②低学年はチームティーチング、高学年は少人数指導を実施し、個々の実態に応じた学習指導をすることができた。	B
特別支援教育	①配慮が必要な児童の支援について、全教職員で共通理解し、対応にあたる。また、関係機関との連携を図り、支援の在り方等について理解を深める。②個別支援学級児童の実態に応じて、交流委員会が中心となって計画を立て、交流を行い、分け隔てのない関係を構築していく。	①特別な配慮が必要な児童に対して、全教職員で共通理解をし、当該児童に適した指導や助言をすることができた。また、専任や家庭・関係機関とも連携し、適切な対応をすることができた。②個別支援学級の児童に対して、全教職員で共通理解をし支援を行えた。	B
児童指導	①「あくわスタンダード」の見直しを児童の実態に合わせて行い、定着を図っていく。また、保護者への理解を進めるため、学校説明会をはじめ、学校便り等で必要に応じて発信していく。②児童の状況に応じて、朝会等で全体指導の場を設け、学校全体で指導していることを確認できるようにする。	①スタンダードの見直しを児童の実態に合わせて行い定着を図った。また、保護者の理解を深く得られるよう、学校だより等で発信した。②定期的かつ臨時の全体指導・学級指導・個人指導を的確かつ効果的に繰り返し行い、適切な指導をすることができた。	A
健やかな体	①食育の授業を実践し、児童の関心を高める。また、健康や食育について、集会等で発信し、日頃の意識を高めていく。②学校保健委員会では、校医や薬剤師を招き、専門的な見地からお話を伺い、児童の保健への関心をもたせるようにする。	①栄養士を交えた食育の授業、集会や委員会等で児童の呼びかけ等を通して、児童の関心を高められた。残食の様子からも食への関心の高さを感じられた。②体育や、休み時間の体力づくり等を通して、健康増進や体力向上、衛生面に関する児童の意識が高められた。	B
地域連携	①保護者の学校への関心を高めるために、教育活動に参加できる機会をつくる。また、懇談会等への参加者を増やすための研修会を取り入れる。②保護者の会と学校との関係を構築し、年間を通して、計画的に支援していただけるような形にする。国際懇談会を活用した取組を行う。	①感染症が心配される中ではあったが、充分な対策をした上で授業参観や行事、個人面談や懇談会を開催し、教育活動に関する保護者の関心を高めた。②数少ない個人面談や懇談会、国際懇談会等の機会を生かして、学校と保護者が児童の現状や目標の共有を図れた。	B
教育環境整備	①情報・視聴覚機器の充実をさらに図り、授業への効果的な活用について研修を行う。②校舎内外の環境整備に努め、児童が安全に学習活動が進められるようにする。また、掲示板を活用し、児童の学習の成果が見えるようにしていく。	①PCやデジタル端末、デジタル教科書や通信アプリ等を生かして、的確かつ効果的な授業を行った。また、臨時休業への準備も行えた。②学級や委員会等が、校内の掲示板等をよく活用し、全校での取組を活性化させていた。	A
いじめへの対応	①月1回いじめ防止委員会を開催し、全教職員が共通理解し学校の現状を把握できるようにする。また、具体的にどのような対応してきたのか、今後どのように進めていくのかなど具体的に話ができるようにする。②定期的にいじめアンケートを実施して、児童の実態を把握する。	①定期的にいじめ防止委員会を開催し、全教職員が共通理解し、現状や未然防止、解決や再発防止等に向けて組織的対応をした。②いじめアンケートを実施するとともに、学年ブロックごとでも毎月会議を行い、児童理解や児童支援、児童指導を行った。	A
人材育成・組織運営（働き方改革）	①低中高ブロックを組織し、必要に応じて連携が図れるようにする。級外教員もブロックに属し、そのブロックの運営に主体的にかかわる。②行事ごとに学校評価を行い、振り返りをする中で、行事の精選を図り、教職員の負担、児童の負担の軽減につながるようにしていく。	①教職員が連携して児童指導ができる組織・体制となり、安定した教育活動を進められた。②学校評価の結果から行事等の内容を改善し、児童に明確な目標や達成感をもたせられたが、臨時休業の影響で行事が連続したので、改善の必要性を感じている。	B
ブロック内評価後の気付き	今年度はブロック間の交流が制限され、児童生徒や教員間で交流する機会がほとんどもてなかった。しかし、その中でも可能な限り児童生徒間での交流ができそうなことを、実務担当者同士で考え、取り組んでいった。また、6年生の進学に備えて、中学校の先生方に学校訪問していただき、子どもたちの様子を見てもらう機会がもてた。次年度以降も今年度と同じ状況になることが考えられるため、小中ブロックで相談して、子どもたちにできる活動を模索して計画を立てていきたい。		
学校関係者評価	まちとともに歩む懇話会の委員の皆様に学校の現状を書面でお伝えした。		
中期取組目標振り返り	今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大のため、当初計画されていた教育活動を大きく変更しながらの取組となった。しかし、その中で、児童一人ひとりが輝くために、創意工夫をしながら、例年に近い形で学校行事等を行うことができた。小規模校のメリットが大いに生かされた結果である。また、今年度の対応により、今までの学習活動の見直しをするきっかけとなり、集団として集まらずにできる活動や、運動会等の時間短縮など、児童や教職員の負担軽減にもつながることが分かった。次年度も、そのような視点をもりながら、学校経営を進めていきたい。		

重点取組分野	令和　3　年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
豊かな心	①特別の教科道徳の充実を図り、年1回以上保護者、地域の方に公開をする。また、道徳推進教諭が中心となって、研修を行う。②YPアセスメントを年2回以上実施し、児童の実態や変容を把握する。その結果を授業に反映させていく。たてわり活動をより充実させ、自己有用感を高めていく。	たてわり活動では、清掃等も取り入れて活動を充実させ、児童の自己有用感を高めた。YPアセスメントを活用し学級づくりや授業に活用した。人権教育には、自己肯定感を高める取組を行った。感染症対策の中でも、全学級での道徳科の授業公開の実施方法を検討していくことが課題である。	A
生きてはたらく知	①「あくわスタンダード」の充実を図り、1～6年生まで一貫した指導ができるようにする。②低学年は取出指導、高学年は少人数算数を実施し、個に応じた指導を進める。算数科を重点研究の教科として取り上げ、児童が主体的に学習にのぞむことができるような数学的活動を研究していく。	「あくわ学習スタンダード」を基に教職員が指導の方向性を共通理解し、一貫した指導を行った。少人数指導やTT・特別支援教室や国際教室での指導、「あくわ道場」や「スキルタイム」、MIMの継続的な活用、重点研究による授業力向上により、基礎学力の定着や言語能力の向上に努めた。	A
特別支援教育	①配慮が必要な児童の支援について、全教職員で共通理解し、対応にあたる。また、関係機関との連携を図り、支援の在り方等について理解を深める。②個別支援学級児童の実態に応じて、交流委員会が中心となって計画を立て、交流を行い、分け隔てのない関係を構築していく。	児童支援専任や特別支援教育Coを中心に、特別な配慮が必要な児童に対して適切な対応方法を見出し、教職員全体で共通理解をした上でより良い支援を推進した。個別支援学級の児童に対して、発達段階や実態を把握し、交流級担任と個別支援級担任が連携して個に応じた支援を行った。	A
児童指導	①「あくわスタンダード」の見直しを児童の実態に合わせて行い、定着を図っていく。また、保護者への理解を進めるため、学校説明会をはじめ、学校便り等で必要に応じて発信していく。②児童の状況に応じて、朝会等で全体指導の場を設け、学校全体で指導していることを確認できるようにする。	「あくわスタンダード」に基づいて、全教職員が同じ観点で、児童指導をした。児童支援専任が中心になって、報告・連絡・相談を密にして地域からの指摘や児童間での問題行動等をできるだけ迅速に把握し、全体指導や学級指導、個別指導を迅速かつ適切・的確に行った。	A
健やかな体	①食育の授業を実践し、児童の関心を高める。また、健康や食育について、集会等で発信し、日頃の意識を高めていく。②学校保健委員会では、校医や薬剤師を招き、専門的な見地からお話を伺い、児童の保健への関心をもたせるようにする。	感染症対策を行いながら、体育科を中心に体力や運動技能の向上に努めた。周年行事や横浜市立小学校体育実技発表会に関連させて、全校でなわとびに取り組み、体力の向上に努めた。健康委員会や学校保健委員会を活用して生活習慣の見直しを指導し、早寝・早起き・朝ごはんの意識の向上に努めた。	A
地域連携	①保護者の学校への関心を高めるために、教育活動に参加できる機会をつくる。また、懇談会等への参加者を増やすための研修会を取り入れる。②保護者の会と学校との関係を構築し、年間を通して、計画的に支援していただけるような形にする。国際懇談会を活用した取組を行う。	開催時期や方法、内容を工夫したことで、授業参観や懇談会、周年行事や実技発表会等に多くの保護者に参観していただいた。特に、学校説明会では7割の保護者に参加いただくことができた。また、学校から伝えたい内容を精選して発信し、保護者の思いや願いも受け止めて教育活動に取り入れた。	B
教育環境整備	①情報・視聴覚機器の充実をさらに図り、授業への効果的な活用について研修を行う。②校舎内外の環境整備に努め、児童が安全に学習活動が進められるようにする。また、掲示板を活用し、児童の学習の成果が見えるようにしていく。	教職員全体で安全点検や修繕に努めて安全な教育環境を整えた。また、学習活動の履歴や成果物、行事等の内容を校内掲示し教育環境を充実させた。さらに、配当された一人一台の端末を有効かつ適切に活用できるように授業改善を行うとともに、個人情報や機器等の安全な指導・管理に努めた。	A
いじめへの対応	①月1回いじめ防止委員会を開催し、全教職員が共通理解し学校の現状を把握できるようにする。また、具体的にどのような対応してきたのか、今後どのように進めていくのかなど具体的に話ができるようにする。②定期的にいじめアンケートを実施して、児童の実態を把握する。	いじめ防止基本方針を基に、全教職員が組織的にいじめの未然防止に努めた。また、日常の児童の観察やいじめ防止委員会や児童へのアンケートの活用、放課後キッズクラブ等との連携を基に情報を収集し、いじめの早期発見に努めた。さらに、いじめ発生の際には、適切かつ的確な早期解決に努めた。	A
人材育成・組織運営（働き方改革）	①低中高ブロックを組織し、必要に応じて連携が図れるようにする。級外教員もブロックに属し、そのブロックの運営に主体的にかかわる。②行事ごとに学校評価を行い、振り返りをする中で、行事の精選を図り、教職員の負担、児童の負担の軽減につながるようにしていく。	少人数やTTでの指導等の学習指導を工夫したり会計処理等の役割を分担したりして、負担の軽減に努めた。低中高ブロックや校内の教科・領域研究会を充実させ、教育力や組織力を高め、人材育成に努めることができた。一つ一つの行事の内容は充実したが、教職員の負担軽減にはつながらなかった。	B
ブロック内評価後の気付き	今年度も、コロナ禍において、小中ブロックでの交流がほとんどできない状況であった。しかし、ブロック間の職員では情報交換を行い、可能な限り交流ができる方向を考えてきた。特に夏に行われた「子ども会議」の取り組みでは、中学校生徒会が中心となり、同じテーマのもと、各学校で取り組むことを決めて実践することができた。また、中学校生活や部活動紹介などを動画にして、各小学校との交流を計画している。来年度は、職員の授業交流を中心に、「児童生徒一人ひとりの個別支援」を考え、つながりを意識した教育活動を今後とも継続していきたい。		
学校関係者評価	まちとともに歩む懇話会の委員の皆様に学校の現状を書面でお伝えした。		
中期取組目標振り返り	今年度も新型コロナウイルス感染症の拡大によって、教育活動の制限が様々な場面であった。その中で、創立40周年記念にかかわる取組を計画的に進めてきた。学校を中心として保護者、地域を巻き込みながら一体となって創立記念を祝う活動を通して、児童の主体的な活動も行うことができた。学年を超えて取り組んできた縄跳び活動では、記念式典や体育実技発表会で成果を披露したことで、大きな自信をもつことにつながった。全児童に配当されたタブレット使った学習も積極的に取り入れ、ギガスクール構想の1年目をスタートすることができた。より豊かな学習につながるように学校として共通理解		